

スサノオの来たみちを探る——出雲～韓国の景観と航路

吉 田 薫

はじめに

古代の出雲国が、日本海を中心にした各地と交流・交易を行っていたことは、遺跡からの出土物や各地に存在する出雲系の神社などから明らかである。

本稿は、このうち朝鮮半島南部～北九州～出雲国の交流・交易ルートを、景観及び航路の面から明らかにしようとするものである。表題に“スサノオ”を冠したのは、各地に往来伝説が残っていること及び初期の交流・交易の象徴と位置付けたことによる。

はじめに、各地とのつながりを示す神話や伝承、遺跡・遺物等の概要を整理する。

【神話・伝承】

○黄泉の国から逃げ帰ったイザナギノミコトは、出雲から筑紫（九州）に至り禊ぎを行い、三貴神（アマテラス、ツクヨミ、スサノオ）を生んだ（記紀）。

○スサノオノミコトは新羅を経由して出雲にやって来た（日本書紀一書）。また、アマテラスとの誓約（うけい）により宗像三女神を生んだ（記紀）。

○オオクニヌシノミコトは、宗像三女神（北九州）のタギリヒメとの間にアジズキタカヒコネノミコトとシタテルヒメを、ヌナカワヒメ（北陸）との間にミホスミノミコトやタケミナカタノミコトをもうけた。また、オオクニヌシは能登半島の気多に渡り、賊を平定した（気多大社社伝）。越の八口を平らげて帰国した（出雲国風土記）。出雲崎より佐渡に渡った（石井神社社伝）。

○出雲国に越の人がやって来て堤を造った（出雲国風土記）。

○崇神天皇に神宝を求められた時、イズモフルネは筑紫に行っていた（記紀）。

【遺跡・遺物】

各地における山陰系土器や出雲産碧玉の出土、出雲国における各地産の土器等

○朝鮮半島南部・・・山陰系土器（靉島遺跡）、花仙山産碧玉（慶州・天馬塚）

○対馬・壱岐・・・山陰系土器（壱岐・原ノ辻遺跡）

○博多湾周辺・・・花仙山産碧玉原石、玉作工房跡、山陰系土器（糸島・潤地頭給遺跡等）

○越・・・山陰系土器（福井市・甕谷在田遺跡、能登半島等）

○出雲市・・・靉島式土器（山持遺跡）、糸島・福井式土器（中野清水遺跡）、糸魚川・ヒスイ勾玉（出雲大社の命主社）

（注）靉島（ヌクト）は朝鮮半島南端沖：図・1 参照。

○松江市周辺・・・朝鮮系無文土器（西川津遺跡、島根半島鹿島沖）、

糸魚川・ヒスイ勾玉（堀部第2遺跡）、北部九州産土器（隠岐島沖）

加えて、スサノオやオオクニヌシなどを祭った出雲系神社は、九州から北陸・関東まで広範に分布している。また、出雲国起源の四隅突出型古墳は遠く北陸地方まで見られる。

A. 景観編：スサノオが見た景観

日本書紀一書は、スサノオノミコトは高天原より新羅国を經由して出雲国に天下ったとする。スサノオの新羅よりの到来伝説は、大田市仁摩町や五十猛町周辺に多く、韓島、神島（かみしま）、韓神新羅神社、五十猛神社等にその伝承がある。また、対馬や壱岐などにもスサノオの朝鮮半島への往来伝承がある。弥生時代にスサノオに比定される人物がいたとすれば、朝鮮半島から対馬～壱岐～北九州を經由した後、日本海沿岸を航行して出雲国にやって来たとして解釈するのが無理のないところであろう。沿岸航行では、目立つ山や岬、島などを目印とする。そこで、出雲より出発して朝鮮半島南岸まで、“スサノオが見た景観”をランドマークでつなぐこととする。

ランドマークの選定

個々のランドマークを選定する前に、ランドマークの条件を検討する。候補を絞り、選定を容易にするためである。

○出雲国の起点

起点は、出雲国の西端に位置し、韓島周辺から目立つ「高尾山」を選定する。なお、高尾山選定の別の理由は後述する。

○見通し距離

ランドマークの間隔は、2015年度の研究報告「古代出雲の山々の景観と国土の把握」に基づき、快晴時の見通し距離 40～50km を目安とする。これは写真撮影のためのものであり、優れた視力を持つ古代人であれば、さらに遠距離が見通せたことだろう。

○スサノオに関わる神話や伝承のある場所

仁摩町の韓島周辺には、前述したようなスサノオ伝説がある。韓島は離島なので、隣接の宅野漁港の防波堤上から見渡せば、風光明媚な海岸風景の中で、高山（馬路）が目立ち、周囲のランドマークになっていることが分かる。

萩市須佐は、スサノオの名を冠した地名である。そして、須佐港の港頭にはランドマークの“高山（こうやま）”がある。



写真-1 高山（馬路）と韓島



写真-2 高山（須佐）と須佐湾

以上の3地点の区間距離を地図上で計測すると、高尾山～高山(馬路) 42km、高山(馬路)～高山(須佐) 89kmとなる。後者は距離が長いので、中間あたりでランドマークと眺望地点を探すと、大麻山が見つかる。大麻山の山頂が見通しに優れていることは、多数の電波塔が建っていることから分かる。

表-1 出雲～釜山までの視対象と視点場

名称	標高(m)	区間距離(km)	対象位置	視点場
高尾山	358	42	山頂	奉納山(73m)
高山(馬路)	499		山頂	宅野漁港防波堤
大麻山	599	49	山頂	山頂
高山(須佐)	533	41	山頂	展望台(山頂傍)
相島	157	35	山頂	—
川尻岬	60	29	山頂	—
角島	15	28	燈台位置(山頂)	展望所(50m)
蓋井島	252	16	燈台位置	燈台(燈火45m)
大島(宗像)	214	28	山頂	—
玄界島	218	40	山頂	風車展望所
呼子	112	29	山頂	—
		37	加部島山頂	風の見える丘
壱岐	213	27	山頂(丘ノ辻)	名護屋城跡
		60	山頂(丘ノ辻)	城山(勝本町)
対馬	230	—	神山	豆酸崎
	71	—	韓国展望所	同左
釜山	—	60	市街地・山地	—

(注) ・区間距離は対象位置間の距離。
・視点場は対象位置近隣の写真撮影場所。

高山(須佐)以西についても同様に、距離と見通しをもとに選定し、**高山(須佐)～相島～川尻岬～角島～蓋井島(ふたおいじま)～大島(宗像)～玄界島～呼子～壱岐～対馬～釜山**と視線をつなぐ。

(ゴシック体太字は、眺望写真を掲載した地点である。)

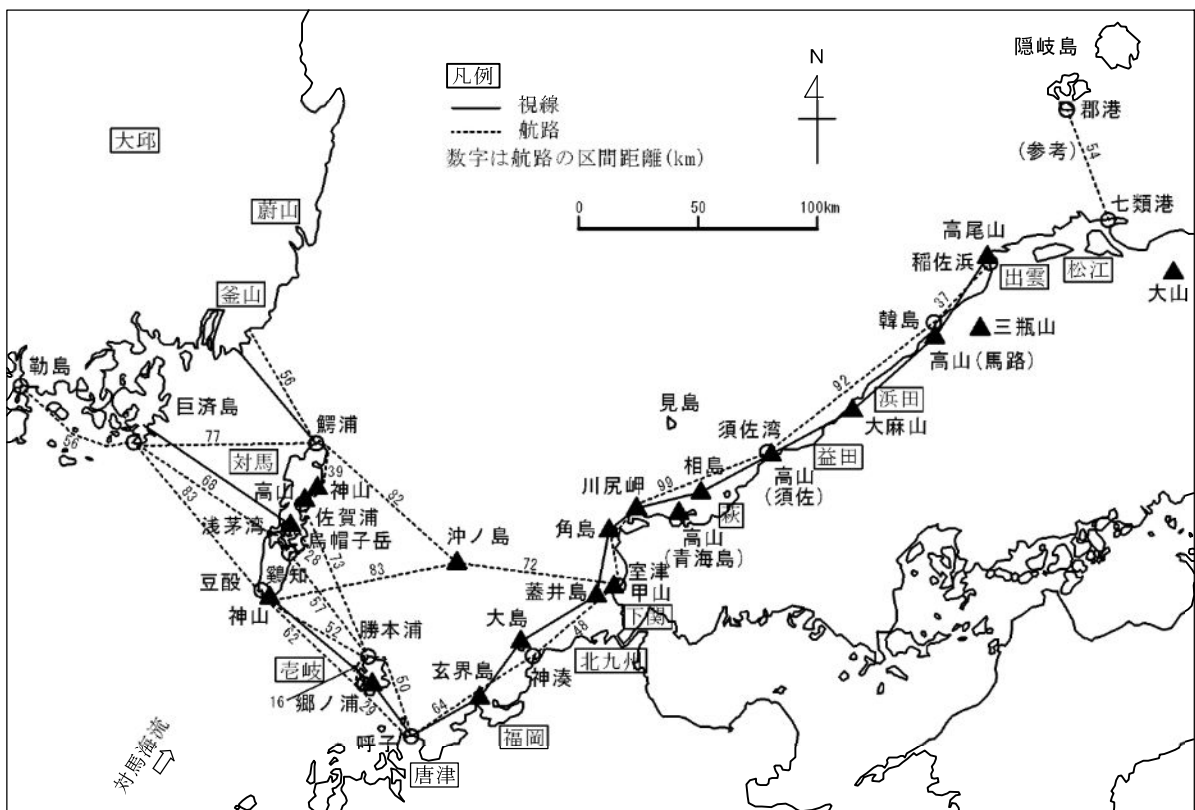


図-1 出雲～釜山までの視対象・視点場と航路

各視点場からの景観

各視点場からの景観を示す。

① 高尾山（視点場：奉納山展望台）

高尾山山頂から南西への展望は、樹木繁茂のために利かない。このため、近隣で見通しのよい奉納山展望台よりの写真を示す。国引きで引いて来た土地をつなぎとめた杭とされる三瓶山の右（西）側に、大江高山から始まる山塊が見える。高山（馬路）は山塊の西端部に位置する。島ノ星山（高角山）は江ノ川河口部に位置する。



写真-3 奉納山からの眺め

② 高山（馬路）



北東の高尾山への展望はスサノオ上陸地とされる神岩のある五十猛町大浦からのものである。高尾山は出雲国ではさほど目立たないが、この場所からは島根半島の西端の高峰としてよく目立つ。ちなみに、同名の高尾山（松江）は、島根半島の東側からたどると最初の300m超の高峰であり、同様にランドマークとなっている。

南西方向には大麻山が見える。



写真-4 韓島周辺からの眺め

③ 大麻山

山頂には多数の電波塔とともに展望台があり、四方に見通しが利く。北東では高山（馬路）、大江高山、南西では高山（須佐）が目立つ。大麻山と高山（須佐）は喧嘩をして石を投げ合ったという伝説があり、大麻山山腹に点在しているゴーロ石がそれだとされる。三瓶山～高山（須佐）間は 107km あるが、空気が澄めばまれに見通せる。



① 北東方向



② 南西方向

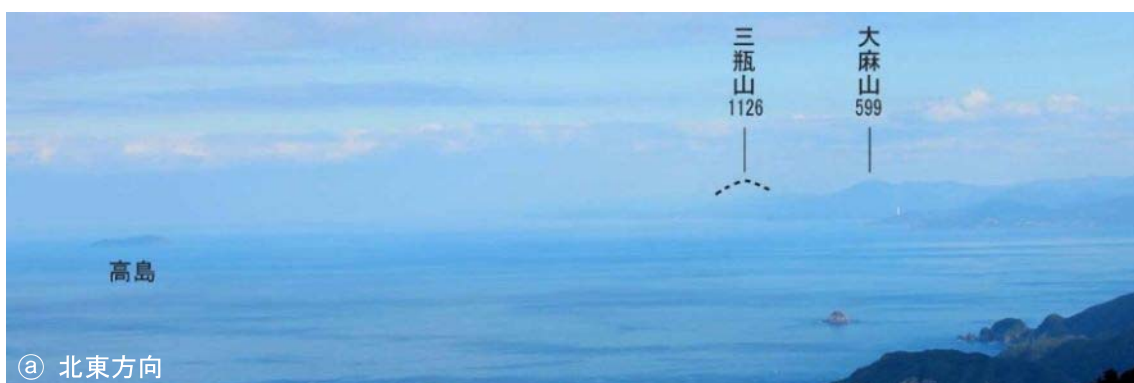
写真-5 大麻山展望台からの眺め



参考：三瓶山から望む大麻山と高山

④ 高山（須佐）

高山の頂上付近に設置された展望台から眺めると、北東では大麻山がよく目立つ。南西では、遠岳山や櫃島が目立つが、これらは西側の川尻岬からは見えないので、ランドマークとしては相島が優れる。次の視点場の川尻岬は 63km の遠方であり、見えないことの方が多い。



① 北東方向



写真-6 高山展望台からの眺め

⑤ 川尻岬

川尻岬は本土から突出した特異な形状をしており、一見の価値がある。

川尻岬から北東を眺めると、相島がよく見える。近くの青海島にも高山がある。この日は二度目の訪問で遠方の高山（須佐）を写真に収めることができた。



写真-7 川尻岬からの眺め

⑥ 角島

本土と島を結ぶ角島大橋は、「土木学会デザイン賞 2003」の優秀賞を受賞した。角島灯台と並び、角島観光のシンボルとされる。島の西端に位置する角島灯台からは、東方の牧崎を超えて川尻岬が見える。視線を屈曲させて南方を眺めると、神宮皇后伝説のある蓋井島（ふたおいじま）が特徴のある姿を現し、見晴らしがよければ男島、女島が見える。また、本土側では室津湾の港頭の甲山（かぶとやま）を視認できる。





写真-8 角島灯台からの眺め

⑦ 大島（宗像）

九州に至る。大島（宗像）には宗像大社の中津宮があり、島北端の風車展望台からは、沖津宮（祭神：オオクニヌシの妻、タギリヒメ）のある沖ノ島が望める。北東に蓋井島、男島、女島が見え、南西では玄界島が一番目立つ。



宗像大社中津宮



風車展望台



沖ノ島



写真-9 大島（宗像）からの眺め

⑧ 呼子

呼子の視点場は、北東を望む加部島の「風に見える丘」と、北西を望む名護屋城跡とする。「風に見える丘」からは、玄界島、姫島、可也山などを眺めることができる他、視界がよければ大島（宗像）を視認することができる。名護屋城天守台跡から北西に向かって、平坦な壱岐島と島で一番高い山・丘ノ辻を視認することができる。案内板には対馬も描いてあり期待をもたせるが、約90kmの遠方であり、かなり空気が澄んだ日でなければ望見は不可能である。



写真-10 呼子からの眺め

⑨ 壱岐

壱岐の視点場は、北端の勝本港側近の城山とする。対馬南端の豆敷崎（つつぎき）の神山（こうやま）、対馬最高峰の矢立山、厳原背後の有明山等が視認できる。



写真-11 壱岐からの眺め（提供：（一社）壱岐市観光連盟）

⑩ 対馬

対馬の主な視点場として、南端の豆酏崎と北端の韓国展望所（上対馬町鰐浦）を挙げた。

対馬海流は豆酏崎において朝鮮海峡と対馬海峡に分流する。帆船時代には潮流に乗って朝鮮半島へ向かう航路の要衝となっていた。気象条件がよければ、写真で示す神崎の先端に横たわる壱岐が見えるはずである。



韓国展望所

韓国展望所は神功皇后の寄港地の鰐浦に近接した高台にある韓国風の望楼で、館内の案内には、対馬と韓国が近い様子が地図で示され、ここより望見した釜山の夜景が展示されている。

なお、対馬西海岸の高所からは、距離的に近い巨済島（コジエド）への眺望があるはずである。



㉑ 南東方向：豆酏崎より



㉒ 北西方向：韓国展望所より



㉓ 北西方向：烏帽子岳展望台より

写真-12 対馬からの眺め（㉒㉓の写真提供：（一社）対馬観光物産協会、写真加工は筆者）

B. 航路編・スサノオの航路

本編では、スサノオが往来したはずの朝鮮半島南部～出雲間の航路を推理する。

古代において、海路は陸路に対して次のような利点があったと考えられる。

- ①ルートの維持管理・道路は築造者と管理者が必要である。その点、海路は船があれば、どのような遠隔地にでも行ける。
- ②輸送量・千石船は馬 1000 頭以上分の荷を運ぶといわれるように、輸送する物資の量に格段の違いがある。小規模な船であっても事情は同じである。
- ③安全性・沿岸航行であれば、天候悪化時にすぐに沿岸に避難ができる。また、盗難や襲撃など治安面でも陸路よりは安全であったと思われる。

なお、舟は原初の形態とし、丸木舟または防水のために舷を高くした準構造船を想定する。帆の有無については言及しないが、高速帆走は次段階のこととする。

寄港地

航海には寄港地が必要である。韓国～出雲間で小舟が停泊する程度の小港は枚挙にいとまないで、前編で挙げたランドマークの近辺で探すこととする。ランドマークの近くに寄港することは、航程を把握するためにも、隊を組んで航行するためにも都合がよいはずである。

次に、スサノオに関わる伝説・伝承の存在に着目する。

仁摩町の韓島周辺や須佐湾は、こうした二つの条件を満たす。また、両者とも読みは異なるが、高山（たかやま、こうやま）が近くにある。漢字の読みの違いに関しては、その普及に伴い、古代の地名・伴部（ともべ）が、→伴部（はんぶ）→半分（はんぶ）に変わった事例（出雲市塩冶町）があり、字面に引かれて地名の読みが変わることがある。同様な事情により、もともとは「コウ山」だったのが、漢字で表記されるうちに「たかやま」と呼ばれるようになったとも考えられる。海岸近くの山や港で「コウ」と読める場所も要注意である。

以上の選定条件による寄港地について、図-1（A：景観編）及び表-2 に示した。

出雲・稲佐浜は出雲西端に位置し、現在、宍道湖・中海等として残る出雲国の入海への入口も近い。高尾山は、もともとは「高山」だったのが、当山地で盛んであった修験道との関わりにおいて、高尾山（八王子市の高尾山は修験の聖地）と変わった可能性がある。

下関・室津という名称からは「室」のように波静かな港であることをうかがわせる。甲山（かぶとやま）は「コウ山」と読める。傍証だが、京丹後市の久美浜湾に臨む兜山は、神山から転じたという説がある（案内板による。地名は甲山：こうやま）。なお、長門・青海島にも高山（たかやま）があり、図-1 及び写真-7 に示した。

宗像の神湊（こうのみなと）は、港名に「神：コウ」がある。ここはスサノオがア

マテラスとの誓約により生んだ宗像三女神の本拠地である。

呼子は天然の良港であり、壱岐至近の港として古来より利用されていたことは確実に、魏志倭人伝記載の末盧国の港ともされる。宗像三女神を祭った田島神社もあり、スサノオが立ち寄った港と考えてもおかしくない。

壱岐には、スサノオが韓国（からくに）を巡り帰国の際、郷ノ浦江上に着岸し、後にここに宮殿を建てたという伝承がある（国津意加美（おかみ）神社「社記」）。

対馬・豆酏は、前述したように航路の要衝であるとともに、天道信仰でも知られる。天道神は陰陽道の方角神の一つで、仏教の牛頭天王やスサノオノミコトと同一の神であるという説がある。「A：景観編」に、豆酏崎より展望した神山（こうやま）と神崎（こうざき）の写真-12を載せている。

『峰町誌』は、対馬の弥生時代の資料は峰町・豊玉町に集中して多く、特に中期後半～後期のものは三根湾岸（島の西側）に集中し、当時の中枢があったとする。朝鮮半島南部と対馬を結ぶ航路は数多くあるが、朝鮮半島南部の巨済島から漕ぎ出して対馬北端の鰐浦あたりに到着するコースは、対馬海流に乗ることができる。なお巨済島は、対馬と弥生土器等が多数出土した勒島（ヌクト）遺跡とを結ぶ経路にある。

鰐浦近隣の上対馬町豊にはスサノオとイソタケルを祭った那祖師神社・島大國魂神社・若宮神社があり、「社伝」は、当時の出雲は朝鮮半島東南部の三韓と親交があり、スサノオは対馬を経由して往復したとする。

航海初期のスサノオの時代には、対馬から壱岐に向かっては鰐浦から東に回った佐賀浦（さかうら）を利用したことが考えられる。佐賀浦には高山（たかやま、141m）

表-2 出雲～朝鮮半島南部までの寄港地（推定）

地名	寄航地	ランドマーク	コウ山	スサノオとの関連	備考
出雲	稲佐浜	たかおさん 高尾山	△	○ 本拠地	・出雲国の西端 ・国譲り神話の天津神との談判の場所
石見馬路	韓島他	たかやま 高山	○	○ 往復伝説	・スサノオ、イソタケル、オオクニヌシ等の事跡が多い(五十猛、神島、複数神社)
長門	須佐湾	こうやま 高山	○	○ 地名	・黄帝社にスサノオ説あり
長門	室津	かぶとやま 甲山	△		・近くの蓋井島、吉母等に神功皇后の帰還伝説
筑紫	こうのみなと 神湊	沖ノ島 大島	△ (港名)	○ 宗像三女神	・子の宗像三女神の本拠地
(末盧国)	呼子港			△ 宗像三女神	・田島神社に宗像三女神が祭祀 ・「魏志倭人伝」末盧国の港 ・壱岐島至近
壱岐	勝本浦			○ 帰還伝説	・対馬至近
対馬	豆酏(ツツ)	こうやま 神山	○	△ 天道神の拠点	・天道神≡牛頭天王≡スサノオ ・朝鮮半島に向かう海流あり
	佐賀浦	たかやま 高山	○	○ 近隣に神社	・近隣(小鹿)にスサノオを祭った神社あり ・古くから開けた三根湾の東港
	鰐浦			○ 近隣に神社	・近隣(豊)にスサノオを祭った神社あり ・神功皇后の寄航地 ・朝鮮半島至近
朝鮮半島南部	巨済島			○ 新羅は経由地	・高天原→新羅→出雲(日本書紀一書) ・対馬至近(釜山・金海周辺の可能性あり)

がある。また、近くの神山（このやま、345m）には、「スサノオがイソタケルを率いて木の種を持って帰朝して植えさせた」という伝承がある（那須加美乃金子神社『神社明細帳』）。

対馬～壱岐の航路も、他に多数存在していることはいままでもない。

1 日の航行距離と航海日数

次に、1 日の航行距離を推定する。

1975 年、魏志倭人伝ルートの航海実験を行った「野生号一世」は帯方郡～末羅国間 1200km を 47 日間かけて航海した。日速度 26km である。ただし、韓国沿岸は随伴船により曳航されたという。

平安時代の紀貫之の「土佐日記」によると、土佐大津～難波淀川尻までの 285km を実質 12 日の航海で渡った。この航海の日速度は 24km となる。

海洋学者の茂在寅男は、これらの事例を踏まえ、寄港、休憩等を含めれば、1 日の航行距離は 23km 前後が無理のないところとする。

近年では、2013 年に海のヒスイロードの存在をアピールすることを目的とした「日本海縄文カヌープロジェクト」が、糸魚川市海岸～上越市海岸までの 26km を 7 時間 50 分かけて航海した。日速度 26km となる。

一方、沿岸を離れて渡海するとなると、距離は長くても天候や風波の激変を避けるために一気に渡ることが望まれる。1982 年に島根県の小学校の PTA により行われた丸木舟「からむしⅡ世号」の実験では、知夫里島の郡港を早朝 4 時 40 分に出発し、隠岐～本土間 54km を 12 時間 43 分か、日の明るいうちに渡りきった。

したがって、帆を使わない場合の通常の 1 日の航行距離は 23km 程度、沿岸を離れて渡海する場合は遠距離であっても休みなしで、ということであろう。

表-3 航行の日速度

名称	野生号一世	紀貫之「土佐日記」	茂在見解	日本海縄文カヌープロジェクト	からむしⅡ世号
船種	古代船 全長16.5m	帆船	古代船	アウトリガー付カヌー 全長5.5m	丸木舟 全長8.2m、幅0.64m
年月日	1975年	934年12月27日～		2013年5月25日	1982年7月24日
出発地	帯方郡	土佐大津		糸魚川市能生町	隠岐知夫里島郡港
経由地	魏志倭人伝ルート			海岸沿い	渡海
到着地	末盧国	難波淀川尻		上越市郷津	島根半島七類港
方向	南	北東		北東	南南東
距離	1200km	285km		沿道25km(26.6km)	56km
時間	47日	12日(航海日数)		7時間50分	12時間43分
日速度	26km/日	24km/日	20～23km/日	26km/日	56km/日
時速	3.2km/h	—	—	3.3km/h(4.8km/h)	4.4km/h
秒速	0.9m/s	—	—	0.9m/s(1.3m/s)	1.2m/s
備考	韓国沿岸は曳航 乗員14人	総日数39日、帆走1日	帆走は追風時のみ、省 力のため	海のヒスイロード 漕ぎ手2～3人 ()書は休憩時間除く	弥生前期以前想定 漕手5人(小学校PTA)
出典	茂在寅男『古代日本の航海術』			上越タイムス	からむし会『縄文の丸 木舟、日本海を渡る』

(注) 1ノット=1.85km/h

表-4 に、朝鮮半島南部を出発して出雲国に到着するまでを、日速度 23km として算出した日数を示した。これによると、巨済島～稲佐浜まで実働 20 日、日和待ちや諸般の事情を考慮すれば、1～2 ヶ月の行程となる。草創期の航海はこのようのものであったと思われる。航海技術の向上などにより、長時間航行、帆走による高速度（7 ノット≒13km/h）航行、航路の短縮（対馬→下関・室津等）などが可能となれば、巨済島～稲佐浜まで 1 週間程度で結べる。

表-4 朝鮮半島南部～出雲の航海日数

地点	地域	距離 (km)	日数	備考
			23km/日	
巨済島	韓国	77	1	渡海
鰐浦	対馬市	39	2	
佐賀浦	対馬市	73	1	渡海
勝本浦	壱岐市	50	1	渡海
呼子港	唐津市	64	3	
神湊	宗像市	49	2	
室津	下関市	99	4	
須佐湾	萩市須佐	92	4	
韓島	大田市	37	2	
稲佐浜	出雲市			
計		580	20	

(注) 渡海は距離に関わらず1日とする。

おわりに・スサノオの役割

スサノオが往来したであろう出雲～朝鮮半島南部の間を景観でなぞり、可能性の高い航路と寄港地を推察した。ランドマークと航路・寄港地は不可分の関係にあり、そのうちの多くで“コウ（神、高、甲）”を通じてスサノオとの関連を見出せた。

スサノオに関わる神社の建立や朝鮮半島往来伝説などは、偶然の漂着や一度の航海で成立するはずがなく、スサノオとその一族の功績は、治安を含めた安全な航路と寄港地の啓開や利害の調整、そして“きまり”をつくり、通行保証（通行手形の発行？）を行ったことではないか。余談だが、たまたま訪ねた壱岐出身の“電力の鬼”松永安左エ門記念館では、氏の業績と強面の雰囲気“荒ぶる神スサノオ”を想起させた。

最後に、行く先々の風光明媚な海岸線や遠望する景色は往古と変わらないように見え、今知るような日本の歴史が何もなかった時の、“縄文・弥生の空気感”に触れることのできた撮影旅行であったことを報告する。

メモ：出雲・松江から各地を訪ねるには？（ストーリーのある観光ルート）

○島根県内コース（日帰り）：奉納山：三瓶山、馬路高山の眺望、韓島周辺：大浦（高尾山の眺望、神島）、宅野漁港（韓島、馬路高山、大麻山の眺望）、五十猛神社、韓神新羅神社、八千矛山神社、大麻山：大麻山展望台（馬路高山、三瓶山、須佐高山の眺望）、大麻山神社・庭園

○長門・筑紫コース（2泊3日）：1日目：出雲市→須佐高山→川尻岬→角島→宗像市、2日目：宗像市→宗像大島→伊都国博物館（青銅鏡多数、出雲関連）→呼子、3日目：風に見える丘（加部島：玄界島展望）、名護屋城（壱岐展望）、名護屋城博物館、呼子朝市

○壱岐・対馬コース（4泊3日）：（前日夜行バス）1日目→博多BT→博多港→壱岐観光：丘ノ辻展望台、原ノ辻遺跡、一支国博物館、月読神社、松永安左エ門記念館、城山（勝本町）他→対馬（夜）、2日目：対馬観光：豆殿崎、小船越、和多津見神社、烏帽子岳展望台、海神社、島大魂神社、韓国展望所、那祖師神社、3日目：対馬観光：巖原→博多港～博多周辺～博多BT（夜行バス、翌日到着）

【名物】いずれも海岸部なので、新鮮な魚介類が豊富である。呼子名物のイカの活造りは、酒を呑みながら味わうことを勧める。発祥の地といわれる壱岐の麦焼酎は、まろやかで飲みやすい。対州ソバは、出雲そばとの関連はないだろうか？ 須佐：ミコトイカ活造り、道の駅むなかた：（土産）、焼明太子・おきゅうと（海草加工品で、他産地のいぎす、えご等と同じ）、呼子：イカ活造り、壱岐：うに井・麦焼酎、対馬：対州そば

参考 1 : 国引き神話における佐伎の国と良波の国はどこなのか



参図-1.1 国引き地図 (提供 : (一社)出雲観光協会)

国引き神話は、ヤツカミズオミツヌノミコトが、出雲国は小さな国だとして、「新羅の岬」、「北門の佐伎の国」、「北門の良波の国」及び「越の都都の岬」から国の余りを引いてきて、今の島根半島を形作ったという『出雲国風土記』の冒頭を飾る物語である。引いて来た場所は、それぞれ朝鮮半島南部、隠岐島前・中ノ島の崎、隠岐島後、能登半島の珠洲と解説されることが多い。

しかし、朝鮮半島や能登半島はともかく、隠岐は土地の余りがあるほど大きくなく、ましてや中ノ島の崎は小さな港町である。また、島根半島から朝鮮半島や能登半島・珠洲までの距離が 400km 程度であるのに対し、隠岐までの距離は 50~60km で、スケール感も合わない。越の国についても、なぜ出雲国に近い能登半島西側の気多辺りではなく、半島を回った東側の珠洲が選ばれたのだろうか。



写真-参 1.1 隠岐・中ノ島の崎
(後鳥羽院の隠岐上陸地として知られる)

(注)難読地名 (順不同、未出含む)

新羅：しらぎ、渤海：ぼっかい、百濟：くだら、高句麗：こうくり、靺鞨：まっかつ、北門：きたど、佐伎：さき、良波：よなみ、越：こし、都都：つつ、珠洲：すず、豆靸：つつ、島前：どうぜん、島後：どうご、豆満江：とまんこう、沃沮：よくそ、楽浪：らくろう、真番：しんばん、臨屯：りんどん、玄菟：げんと、濊：わい、把婁：はろう、夫余：ふよ

そこで疑問の多い、「北門の佐伎の国」と「北門の良波の国」の候補地を探索する。

航路の検討で記述したように、対馬にも越国と同様にツツ（豆靛）がある。いずれも航路の要衝であり、一方は朝鮮半島、他方は越国を睥睨する位置にある。何らかの関係がないだろうか、地図上で豆靛と珠洲（都都）とを直線（830km）で結び、試しにこの線に垂直二等分線を引いてみる。するとその線の先には隠岐と大山が位置する。こうなれば、国引き神話との関連を意識せざるを得ない。

よって、豆靛—珠洲を基線とし、次の3案（説）を考えた。

第1案：日本海等分割説、第2案：地名由来説、第1案と第2案の折衷的な第3案：山水由来説である。参図-1.2～1.4において、①新羅の国、②佐伎の国、③良波の国、④越の都都の岬として、それぞれの位置を示した。なお、本稿は位置関係のみを述べるものであり、位置の把握方法等の説明は次段階のことと考えたい。

【第1案】日本海等分割説

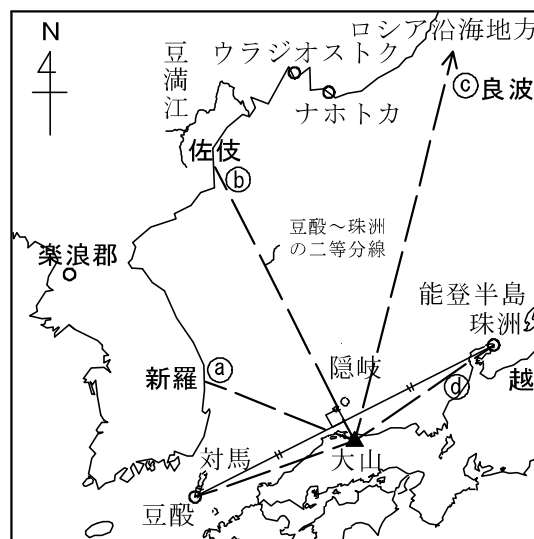
豆靛—大山—珠洲（④越）の間の日本海を、手を開いて5本指を置くように四分割すると、①新羅は朝鮮半島南部に収まり、②佐伎の国は北朝鮮の豆満江辺り、③良波の国はロシア沿海州辺りとなる。

地理的なバランスのとれた説だが、それ以上の理由付けができないことが弱点である。

【第2案】地名由来説

古代において、出雲国と朝鮮半島との関わりが深いことは既述した。出雲国風土記ができた頃（733年）、朝鮮半島周辺には、新羅、唐、渤海があった。遡ると、新羅、百済、高句麗が鼎立した時代があり、外縁部には靺鞨があった。さらに時代は前後するが、漢の支配下の楽浪郡や帯方郡（もとの漢四郡は楽浪郡、真番郡、臨屯郡、玄菟郡、その前は衛氏朝鮮）、馬韓、辰韓、弁韓、濊、沃沮、把婁、夫余などがあった。国引き神話に新羅のみならず、これらの地名（国名）が出てくれば候補とすることができる。

以上の中では、「良波」と「楽浪」が似ている。良（ら）と楽（らく）（いずれも呉音）は読みや意味が近い。また、「波」と「浪」は大・小の区別はあるが同じ現象であり、「波



参図-1.2 日本海等分割説



参図-1.3 地名由来説

浪」の熟語がある。よって㉔良波の国は楽浪郡と比定する。

では、㉕佐伎の国はどこだろうか。調べてみると、帯方郡に崎離宮という場所があったことが記録されている。㉕佐伎の国をここに特定できるわけではないが、帯方郡のいずれかの場所に求めることができれば、地理的なバランスがとれる。

【第3案】山水由来説

正確な地図や暦が普及していない古代において、東西南北の方角は重要である。

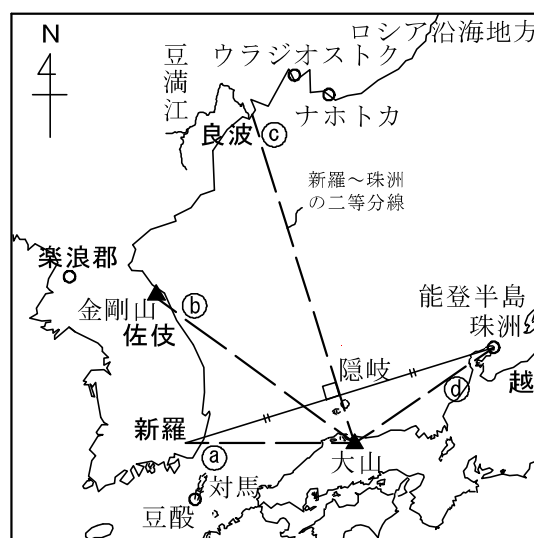
まず、大山の真西に位置する㉖新羅を選定する。㉗越は通説どおり珠洲とする。

次に、新羅—珠洲の二等分線を北に伸長すると、隠岐道後を經由して豆満江下流に至る。この辺りは、漢時代には沃沮と呼ばれた。「沃沮」は湿潤な土地や波を意味し、「良波」と“水”が共通する。また、良波と楽浪が類似した名称であることは前述のとおりであり、楽浪郡の中心地とは少し離れるが、その影響下にあった土地と解釈することも可能である。よって、ここを㉔良波の国とする。

そして、半島内で㉕佐伎の国を探すと、線㉖と線㉔の間に線㉕を引くと、そこには名山として著名な金剛山がある。佐伎を「崎」とし、「山奇なり」と解釈すると、金剛山と結びつく。

個人的には、地理・景観から説明できる第3案：山水由来説に傾くが、それ以上の解説はできない。ウラジオストク周辺域の新石器時代の遺跡から出土した黒曜石は隠岐産であるという説もあり、遺跡調査の進展による今後の解明が期待される。

いずれにしろ国引き神話は、豆靛や大山、珠洲を基点・目標とし、日本海の交流・交易を示唆していると思われる。



参図-1.4 山水由来説

参考2：

国引き神話における陰陽五行思想

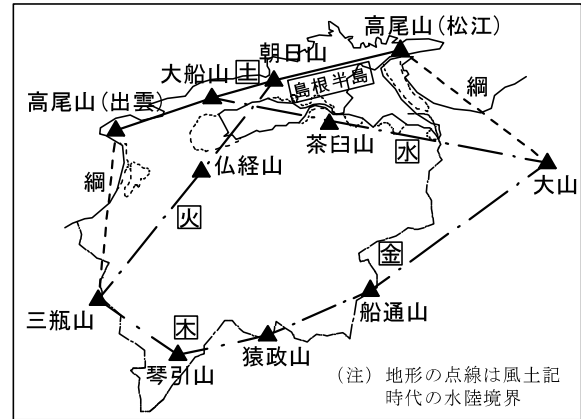
2013年度の研究報告「出雲建国の国引き神話とかんなび山」において、役割が不明な出雲国の四つのカンナビ山（仏経山、大船山、朝日山、茶臼山）は、土地を固定する杭ではないか、と発表した。このとき、三瓶山—仏経山—朝日山（神名火）を「火のライン」、大山—茶臼山—大船山（神名樋）を「水のライン」とした。

本稿では、これを敷衍して五行思想に基づき、参図-2.1において、木・火・土・金・水のラインを入れた。（木：木材の生産、金：砂鉄の生産等に配慮したが、根拠は弱い。）

1000m超の高峰（三瓶山、琴引山、猿政山、船通山、大山・・・仮称：出雲五大神峰）、四座のカンナビ山、島根半島、そして島根半島両端の高峰・二つの高尾山に結んだ「国引きの綱」により出雲国をしっかりと固定できる。

また同時に、多くの地物が対（陰陽の対応）になっていることが分かる。秀峰：大山—三瓶山、内陸のカンナビ山：仏経山—茶臼山、半島のカンナビ山：朝日山—大船山、神話のある山：船通山—琴引山、半島東西端の同名の山：高尾山、国引きの綱：菌の長浜—弓ヶ浜などである。さらに引いてきた場所、「新羅の岬」と「越の都都の岬」、「北門の佐伎の国」と「北門の良波の国」も対となっている。

古代出雲国では、中国の春秋戦国時代頃に起源をもつ「陰陽五行思想」による国土の安定が図られていたとみることもできる。



参図-2.1 五行思想に基づく各山の関係

参考3. エジプトのピラミッドとナイル川の護岸

古代の景観や河川というつながりで、エジプトのピラミッドについて考えてみた。

エジプトの国土は、東西・南北が約 1000km で正方形に近い(面積約 100 万 km²)。ナイル川は、この国土の少し東寄りを南から北に向かって流れる。グーグルマップの航空写真で一目瞭然だが、緑地はナイル川下流のカイロ周辺の三角州と川沿いの 10km~20km 幅が主で、他のほとんどは砂漠である。中部ルクソール辺りの年降水量は 0mm であることには驚かされる。“エジプトはナイルのたまもの”(ヘロドトス)とはよくいったものだ。

ナイル川下流域西岸の緑地帯の外側に、約 4500 年前に造られた三大ピラミッドを始めとして、古王国時代のピラミッドが 100 基以上ある。ピラミッドは王の墓とされるが、必要以上に巨大であることやその形状についての説明がつかず、“ピラミッドは何のために造られたのか?” は世界七不思議の一つとされる。ウィキペディアによると、農民救済のための公共事業説、神殿(の一部)説、天文観測施設説、からみ(土砂堆積、河道コントロール)説などがある。

これらの説は、概して「一つの論拠+想像」によるといっていいだろう。

土木的知識をもとに、次のような説を考えた。ネット検索ではたどりつけなかったが、類似の説はあるかもしれない。

【代償景観説】

古王国以前のエジプトは、上（南）・下（北）二王国に分かれおり、時を経て上エジプトにより統一された。上エジプトの領域であったアスワン（アスワンダム直下流の都市）からアブシンベル神殿（アスワンハイダム建設によって水没するため、各国の協力で移築された）の間に広がるヌビア砂漠には、ピラミッドに似た風化残丘が多数点在する。

「代償景観説」は、ピラミッドは国土統一の証しとして、南部の風化残丘を模して造られた、とするものである。当初は小規模に造られただろうが、段々と拡大化・先鋭化するの世の常である。三大ピラミッドはそのピークである。



写真-参 3.1 三大ピラミッド



写真-参 3.2 ヌビア砂漠の風化残丘

【土木技術普及説】

ナイル川沿岸には、ナツメヤシ、バナナの木などが茂り、古代より豊かな農村であったことを想像させる。河岸には護岸が施され、沿岸には揚水のためのポンプ場が点々と見られる。

古代国家の草創期において、生産力の増大は最も重要な課題の一つである。そのため、農耕地造成やかんがい施設の建設、河道を固定するための護岸工事などをする必要がある。



写真-参 3.3 ナイル川の護岸

「土木技術普及説」は、未開の人々に対する土木工事や集団労働の訓練の場がピラミッド建設であったとするものである。ただし、この説の難点は、大規模な土木工事が行われた証拠を示す必要があることや、主旨からいえば主客転倒となる、ピラミッドを造ることに精力が注がれた理由を別途説明しなければならないことである。